

English Placement Test の開発および 国際関係学部英語科目の習熟度別クラス分けについて

今村洋美・柳 朋宏・山田伸明

1 はじめに

中部大学国際関係学部共通科目の地域言語科目の中に、1期～6期にわたり開講される英語Ⅰ～英語Ⅵがあり¹⁾、日本人教師と外国人教師が2～3名でチームを組んで担当している。各担当者は、英語の4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）のそれぞれに焦点をあてたテキストを使用し、科目全体として、バランスのとれた英語能力が習得出来る内容で構成されている。また、英語圏の文化に対する理解を深め、よりよい異文化コミュニケーションが出来るよう、総合的な英語力の向上を目指した授業を行なっている。

近年、学生の学力差、特に英語力の差はますます広がってきている。そのため、外国語（英語）教育をより効果的に実施するには、学生一人ひとりの学力を出来る限り定期的に測定し、各学生のレベルにあったクラス編成を行なう必要がある。しかしながら、平成12年（2000年）度までは、入学時に実施されるフレッシュマンテストの結果をもとに英語Ⅰのクラス分けを行なった後は、基本的には英語Ⅵまで同じクラスで持ち上がるようになっていた。そのため、フレッシュマンテストの結果が良くなく、英語Ⅰを下位クラスで受講することになった学生は、授業を受けているうちに実力をつけ英語力を伸ばしたとしても、3年次の英語Ⅴ・Ⅵまで下位クラスのま

ま受講しなければならない状況であった。

そこで、平成13年（2001年）度に、英語力の向上に合わせ、学生一人ひとりの学力にあったクラス編成を行なうため、English Placement Test を年度末に実施することとなった。これにより、1年次から2年次、2年次から3年次にかけて、学生のその時の英語力に合ったクラスの再編成が行なえるようになった。本稿では、平成13～14年（2001～2002年）度の2度にわたり実施したEnglish Placement Test の開発過程とその内容、及び各年度の統計結果などを報告したい。

2 English Placement Test の開発

本節では、実際に我々が取り組んだEnglish Placement Test の開発過程について具体的に解説していきたい。

まず、中部大学の学生に合ったEnglish Placement Test にするために、テストの構成およびテスト時間を決めることから開始した。英語の一般的運用能力試験として広く世界的に受け入れられ、外国語の一斉試験として世界で最も妥当性と信頼性が高いといわれているTOEIC、TOEFL、Michigan Test などをはじめ、中部大学の過去の入試問題や大学入試センター試験、そして以前人文学部英語英米文科学科の塩澤正氏らと一緒に開発した標準テストの問題などを含めて、English Placement Test の構成を検討していった²⁾。

2.1 English Placement Test の構成

検討の結果、全体を4つのセクションに分けることとした：リーディング問題（セクション1）、文法問題（セクション2）、会話問題（セクション3）、リスニング問題（セクション4）。セクション4のリスニング問題は、さらに3つのパートから成る構成とした。問題数は、中部大学内でプレースメントテストとして使用することを考慮し、総計40問とした。選択肢は、1st version（2001年度版）ではすべて(a)～(d)の4肢としたが、2nd version（2002年度版）では会話問題のみ(a)～(f)の6肢に修正変更した。この点に関し

ては、「3 English Placement Test の実施と改良」で詳しく述べたい。

出来上がった English Placement Test のセクション1～3までの問題を英語教員（今村と柳）で解き、さらに今村クラスの学生に試験的に解いてもらい、解答時間を測定した。その結果、セクション1～3の解答時間は25分が妥当であると判断した。セクション4のリスニングテストは15分構成となっているので、計40分の English Placement Test とすることとした。各セクション、パートの問題数などは表1に示す通りである。

表1 English Placement Test の構成内容

セクション		問題数	問題番号	解答時間
1	リーディング	8	1～8	25 分
2	文法	8	9～16	
3	会話	4	17～20	
4	リスニング	Part A	21～26	15 分
		Part B	27～32	
		Part C	33～40	
計		40		40 分

2.2 Listening Test の出題形式

表1に示しているように、リスニング問題は3つのパートに分かれており、合計20問から成っている。それぞれのパートの出題形式は以下の通りである。

Part A の問題は計6問（21～26）である。各問題はA・B 2人の会話文から成っている。Aの発話に対して最も自然と思われるBの受け応えを、それぞれ(a)～(d)のうちから一つ選ばせる形式である。

Part B の問題は計6問（27～32）である。それぞれの問題毎に、まず短い会話が流れ、

その後に第三者からの質問が1つなされる。その質問に対する答えとして最も適当なものを、それぞれ(a)～(d)のうちから一つ選ばせる形式である。

Part C の問題は計8問（33～40）である。まずやや長めの文章や対話が流れてくる。続けてその内容についての質問が、流れてきた文章や対話に対して4つずつなされるので、質問を聞いた後、その質問に対する答えとして最も適当なものを、それぞれ(a)～(d)のうちから一つ選ばせる形式である。

各パートのはじめに、英語での解説と例題

をテープで流し、日本語での解説と例題を問題冊子に載せることとした。また、TOEIC や TOEFL などと同様、各問題は 1 度しか読めないものとし、1 問の解答時間は 10 秒とした。

3 English Placement Test の 実施と改良

開発した English Placement Test (1st version) を、国際関係学部の英語 II および英語 IV の受講生全員に対して、英語 II および英語 IV の担当教員の協力のもと、2001 年 12 月 12 日（水）15:10～16:00 に 3 教室（国際関係学科 2 年: 1511、国際文化学科 2 年: 1512、国際関係学科・国際文化学科 1 年他: 1521）で実施した。しかし、PASEO (Preparation for Academic Study in English Overseas) の授業と重なり、English Placement Test に出席できない学生がいたため、OPELT (Ohio Program for English Language Teaching) の先生方からの要望を考慮し、2002 年度は期末テスト期間に実施した。

English Placement Test (2nd version) は、2003 年 1 月 15 日（水）に英語 II の履修者を対象に 957 教室で、1 月 16 日（木）に英語 IV の履修者を対象に 956 教室で、それぞれ実施した。しかし、期末テスト期間中に行なったため、オハイオ大学に留学していて英語 II や英語 IV を履修していない学生は一緒にテストを受けることができないなどの問題が生じた。そのため、2003 年度以降は、12 月第 2 水曜日の国際関係学部の P. S. H. (Professor-Student Hour) の時間帯を利用して、15:10～16:00 に実施する予定である³⁾。

English Placement Test (1st version) の実施後、改良すべき点が出てきた。1st version (2001 年度版) では、選択肢が 4 つ

からなる語学センター所有のマークシートを使用させてもらったため、セクション 3 の会話問題で錯乱肢を作ることができず、他の問題に比べ正答率が高くなってしまった（全問題の平均正答率が 49.1% であったのに対し、セクション 3 の正答率は 81.2%～94.5% であった）。そこで 2nd version (2002 年度版) では、選択肢が 6 つからなるマークシートを独自に作成し、それに合わせて会話問題も錯乱肢を含めて 6 肢から解答させる問題に作り直した。

また、リスニング問題のテープも音声が開きづらい部分があったため、2002 年 5 月にメディア教育センターで録音し直した。

4 結果と考察

2001 年度、2002 年度に実施した English Placement Test の全受験者の統計結果はそれぞれ、表 2、表 3 に示す通りである。ここでは問題全体を 2 つ（セクション 1～3 とセクション 4）に分け、それぞれの統計結果と合計の統計結果を示してある。問題数は表 1 で示したように、セクション 1～3、セクション 4 が各々 20 問、計 40 問である。配点は 1 問 2.5 点としたので、セクション 1～3、セクション 4 の各々が 50 点満点、合計が 100 点満点である⁴⁾。

表2 2001年度 English Placement Test 全受験者の統計結果

統計値	セクション		合計
	1～3	4	
受験者数 (N)	165.00	165.00	165.00
項目合計数 (K)	20.00	20.00	40.00
平均値 ($\bar{X}$)	27.45	21.71	49.17
最頻値	30.00	22.50	50.00
中央値	30.00	22.50	50.00
中点	23.75	23.75	51.25
最高点	45.00	45.00	87.50
最低点	2.50	2.50	15.00
範囲	43.50	43.50	73.50
標準偏差	8.40	7.51	13.68

表3 2002年度 English Placement Test 全受験者の統計結果

統計値	セクション		合計
	1～3	4	
受験者数 (N)	166.00	166.00	166.00
項目合計数 (K)	20.00	20.00	40.00
平均値 ($\bar{X}$)	25.48	22.24	47.73
最頻値	32.50	20.00	52.50
中央値	25.00	22.50	47.50
中点	25.00	23.75	47.50
最高点	42.50	40.00	77.50
最低点	7.50	7.50	17.50
範囲	36.00	33.50	61.00
標準偏差	8.08	6.89	13.18

2001年度と比べると、2002年度の平均点は、セクション1～3と合計でわずかに下がっているが、セクション4（リスニング問題）で上がっていることがわかる。また、得点の範囲が狭まっていることから、得点のばらつき

が少なくなっていることがわかる。

次に、各年度の得点分布をみてみよう。図1、図2はそれぞれ、2001年度、2002年度の得点分布をヒストグラムで表わしたものである。

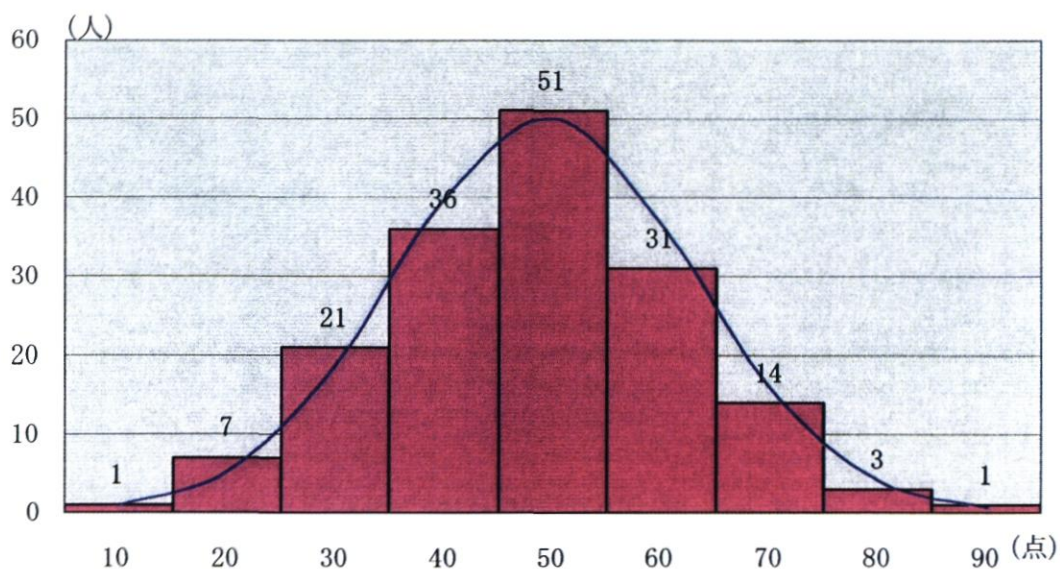


図 1 2001 年度 全受験者の得点分布

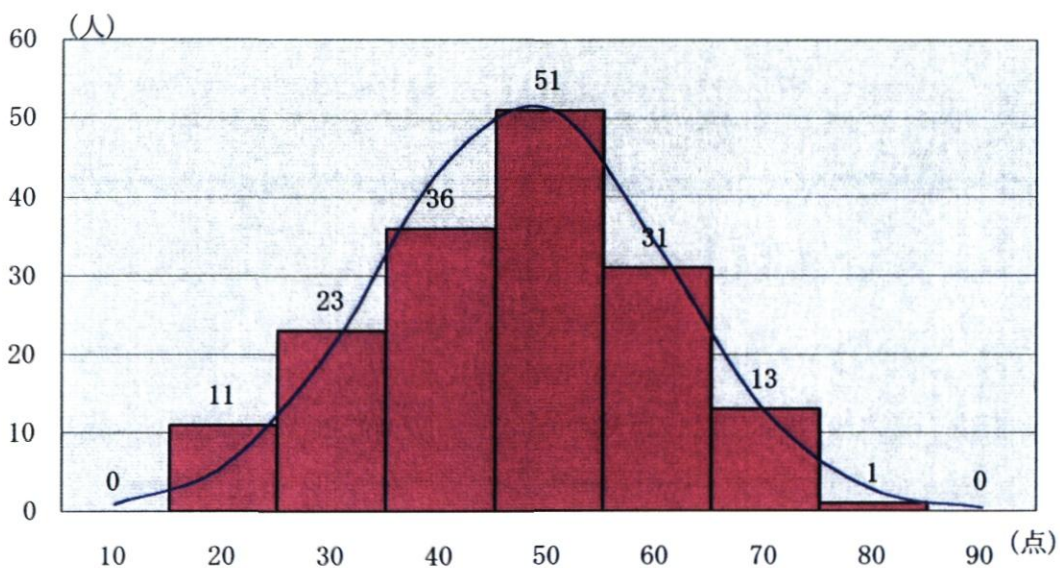


図 2 2002 年度 全受験者の得点分布

図 1、図 2 の曲線は、それぞれ、(平均 49.17、標準偏差 13.68)、(平均 47.73、標準偏差 13.18) の正規分布曲線である。2001 年度、2002 年度ともに、得点分布は完全な正規分布とまではいかないが、それに近いものになっていることがわかる。

次に、各年度のセクション 1～3 とセクション 4 の得点分布をみてみよう。図 3 は 2001 年度の得点分布、図 4 は 2002 年度の得点分布である。図中の凡例では便宜上、セクション 1～3 を Reading、セクション 4 を Listening と示してある。

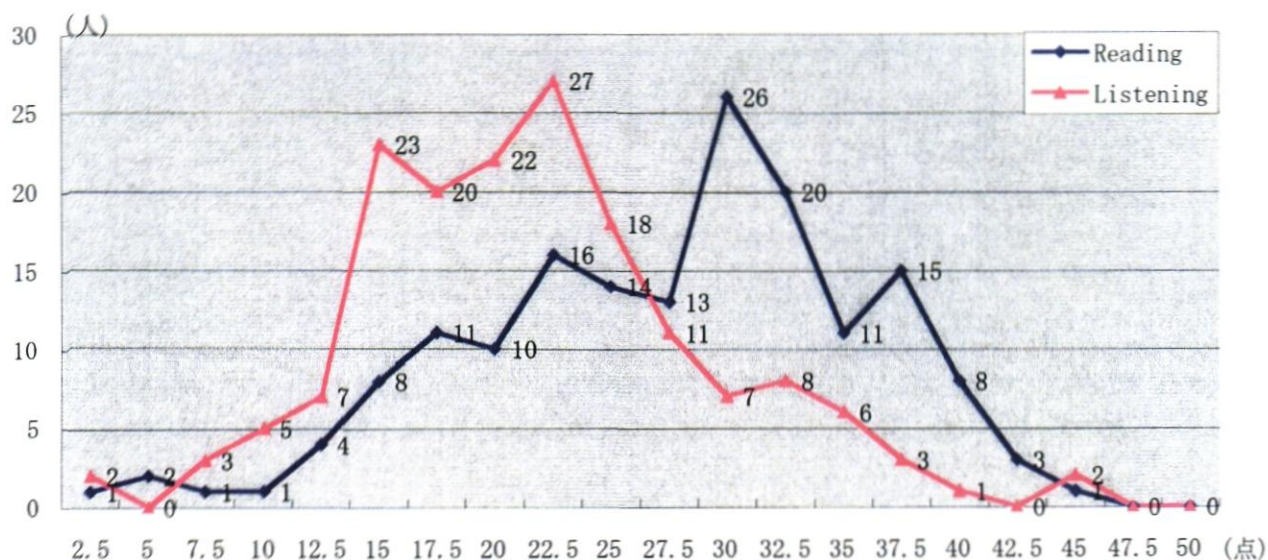


図3 2001年度 全受験者のセクション別得点分布

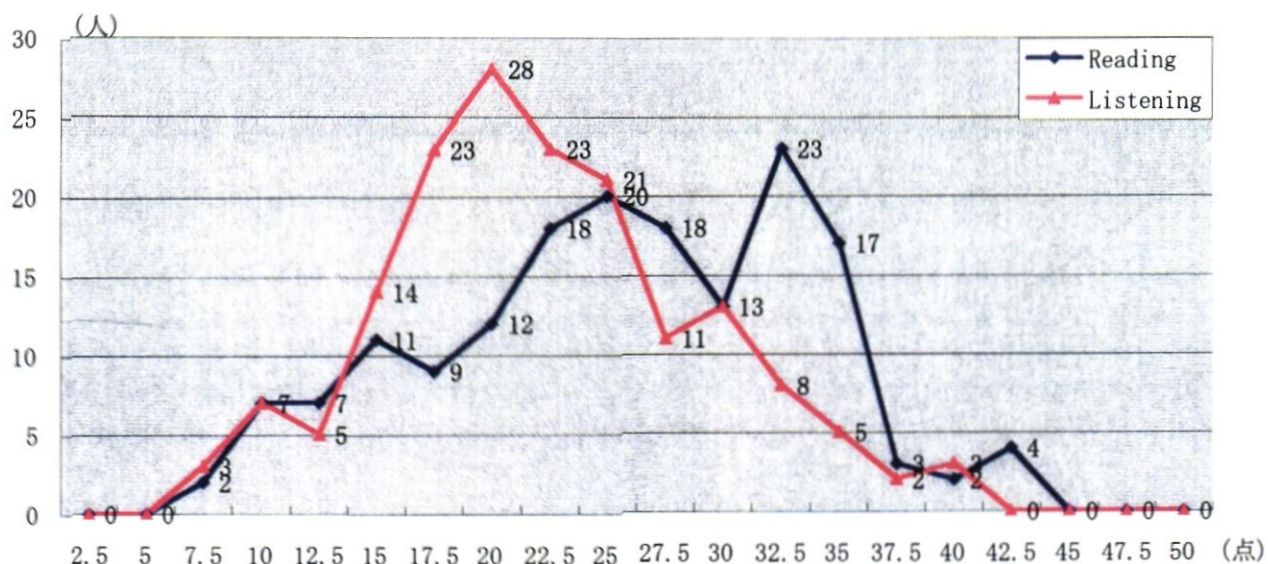


図4 2002年度 全受験者のセクション別得点分布

どちらの年度もReadingのグラフがListeningのグラフよりも右寄りであることから、Readingの得点の方が全体的によかったことがわかる。

では、個々の問題の正答率についてももう少し詳しくみてみよう。セクション1～3の2001年度、2002年度における正答率は図5に示す通りである。

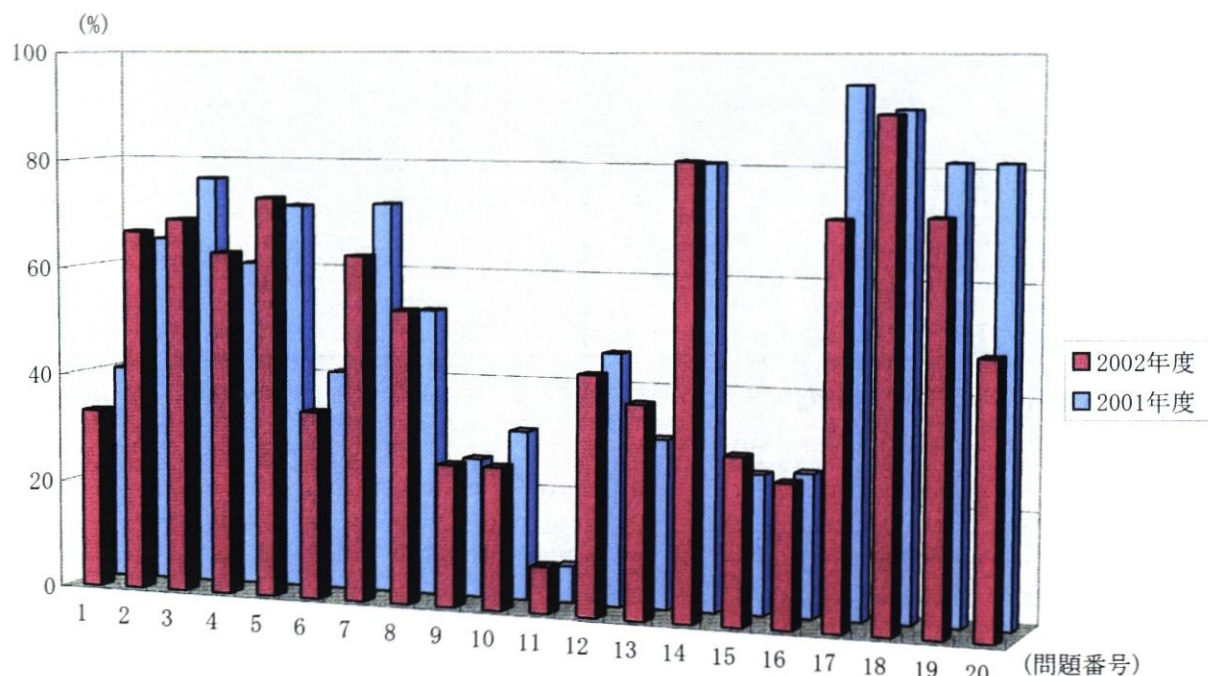


図5 セクション1～3の正答率比較

問題番号1～8がセクション1（リーディング問題）、問題番号9～16がセクション2（文法問題）、問題番号17～20がセクション3（会話問題）である。2001年度のセクション3（会話問題）の正答率が他のセクションに比べて極端に高いのは、2節で述べた通り、錯乱肢がなかったためであると推測される。実際、錯乱肢を含め6肢に変更した2002年度では、問題番号17～20の正答率が60%前後に下がり、プレースメントテストとして適正な内容に改善されたことがわかる。

セクション1（1～8）の平均正答率は、2001年度が59.8%、2002年度が57.1%であった。これに対し、セクション2（9～16）の平均正答率は、2001年度が34.0%、2002年度が34.9%であった。このように、セクション2の文法問題の正答率が極端に低いこと

がわかる。ちなみに、問題番号1～20の平均正答率は、2001年度が59.4%、2002年度が50.9%であった。

次に、セクション4の各問題の正答率をみてみよう。2001年度、2002年度における各問題の正答率は図6に示す通りである。

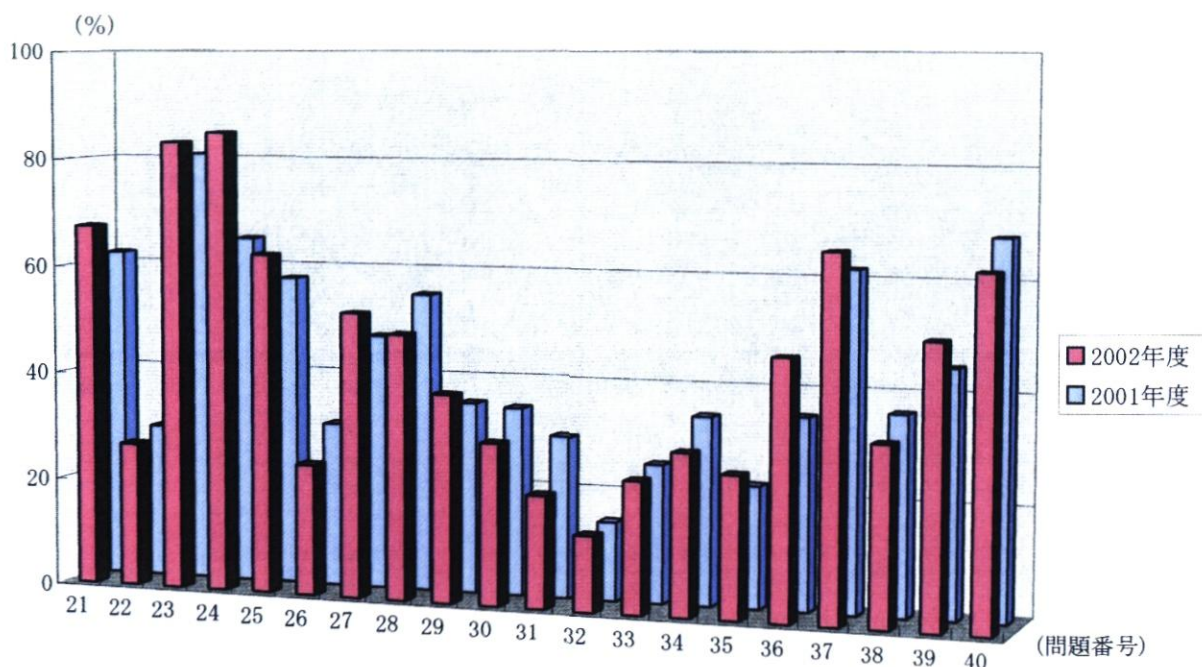


図6 セクション4の正答率比較

問題番号21～26がPart A、問題番号27～32がPart B、問題番号33～40がPart Cである。図6からPart Bの問題の正答率が他の2つのパートに比べて低いことがわかる。セクション4における平均正答率は、2001年度が43.4%、2002年度が44.4%と、わずかに伸びているが、個々の問題の正答率をみると、2002年度の方が正答率が低いものもある。

最後に、各受験者の得点とクラスの推移についてみてみることにする。2001年度と2002年度両方のEnglish Placement Testを受験した学生は、国際関係学科(N)が37名、国際文化学科(L)が22名であった。各個人の得点の変化は、国際関係学科は表4に、国際文化学科は表5に、それぞれ示す通りである(実際の学生番号ではなく通し番号を用いて

いる)。

表4、表5において、2002年度の得点が2001年度に比べて、12.5点以上上がった者は12名おり、青色で示してある。逆に、2002年度の得点が2001年度に比べて、12.5点以上下がった者は4名おり、赤色で示してある。

表6、表7は表4、表5と同じ学生の1年次(2001年度)から3年次(2003年度)にかけてのクラスの推移である。English Placement Testの結果が反映され、クラス再編成の際に、上位クラスへ移動した学生、逆に下位クラスへ移動した学生がいることがわかる。ただし、クラス人数の制限や、English Placement Test以外の要因も加味されるので、必ずしも同じ得点の者が同じクラスに配置されているわけではない。

表 4 国際関係学科（得点）

	セクション					
	1～3		4		合計	
	2001	2002	2001	2002	2001	2002
N1	35.0	35.0	32.5	35.0	67.5	70.0
N2	37.5	42.5	32.5	22.5	70.0	65.0
N3	30.0	32.5	20.0	17.5	50.0	50.0
N4	22.5	30.0	15.0	20.0	37.5	50.0
N5	20.0	27.5	25.0	32.5	45.0	60.0
N6	17.5	25.0	20.0	27.5	37.5	52.5
N7	37.5	42.5	17.5	25.0	55.0	67.5
N8	27.5	27.5	20.0	25.0	47.5	52.5
N9	25.0	15.0	20.0	7.5	45.0	22.5
N10	27.5	32.5	25.0	20.0	52.5	52.5
N11	12.5	22.5	10.0	15.0	22.5	37.5
N12	35.0	30.0	32.5	32.5	67.5	62.5
N13	27.5	35.0	30.0	20.0	57.5	55.0
N14	30.0	27.5	15.0	25.0	45.0	52.5
N15	20.0	32.5	30.0	27.5	50.0	60.0
N16	30.0	22.5	25.0	15.0	55.0	37.5
N17	37.5	32.5	25.0	30.0	62.5	62.5
N18	22.5	15.0	22.5	20.0	45.0	35.0
N19	25.0	25.0	25.0	27.5	50.0	52.5
N20	17.5	15.0	17.5	20.0	35.0	35.0
N21	25.0	30.0	20.0	20.0	45.0	50.0
N22	45.0	40.0	35.0	32.5	80.0	72.5
N23	25.0	27.5	15.0	17.5	40.0	45.0
N24	17.5	20.0	22.5	30.0	40.0	50.0
N25	15.0	25.0	2.5	15.0	17.5	40.0
N26	15.0	10.0	17.5	17.5	32.5	27.5
N27	12.5	17.5	7.5	15.0	20.0	32.5
N28	12.5	15.0	7.5	20.0	20.0	35.0
N29	10.0	12.5	15.0	20.0	25.0	32.5
N30	15.0	12.5	15.0	10.0	30.0	22.5
N31	30.0	35.0	7.5	25.0	37.5	60.0
N32	27.5	32.5	35.0	25.0	62.5	57.5
N33	27.5	30.0	30.0	27.5	57.5	57.5
N34	32.5	20.0	17.5	17.5	50.0	37.5
N35	22.5	27.5	17.5	25.0	40.0	52.5
N36	35.0	25.0	17.5	22.5	52.5	47.5
N37	32.5	35.0	25.0	30.0	57.5	65.0

表 5 国際文化学科（得点）

	セクション					
	1～3		4		合計	
	2001	2002	2001	2002	2001	2002
L1	25.0	25.0	15.0	27.5	40.0	52.5
L2	30.0	35.0	25.0	35.0	55.0	70.0
L3	5.0	10.0	22.5	7.5	27.5	17.5
L4	30.0	25.0	25.0	32.5	55.0	57.5
L5	32.5	30.0	22.5	22.5	55.0	52.5
L6	22.5	25.0	25.0	22.5	47.5	47.5
L7	15.0	22.5	20.0	15.0	35.0	37.5
L8	40.0	32.5	30.0	20.0	70.0	52.5
L9	15.0	20.0	22.5	17.5	37.5	37.5
L10	22.5	22.5	17.5	27.5	40.0	50.0
L11	40.0	35.0	20.0	35.0	60.0	70.0
L12	37.5	32.5	27.5	40.0	65.0	72.5
L13	35.0	25.0	20.0	30.0	55.0	55.0
L14	22.5	35.0	35.0	17.5	57.5	52.5
L15	42.5	42.5	25.0	20.0	67.5	62.5
L16	27.5	20.0	22.5	22.5	50.0	42.5
L17	22.5	10.0	12.5	17.5	35.0	27.5
L18	25.0	17.5	25.0	20.0	50.0	37.5
L19	5.0	15.0	10.0	10.0	15.0	25.0
L20	30.0	25.0	22.5	35.0	52.5	60.0
L21	22.5	22.5	12.5	10.0	35.0	32.5
L22	27.5	32.5	20.0	32.5	47.5	65.0

表 6 国際関係学科 (クラス)

	2001	2002	2003
N1	A	--	A
N2	A	A	A
N3	B	B	B
N4	B	C	B
N5	D	C	A
N6	D	C	B
N7	A	A	A
N8	B	B	B
N9	E	C	D
N10	B	B	B
N11	E	D	C
N12	A	A	A
N13	A	A	B
N14	C	--	B
N15	C	B	A
N16	D	B	C
N17	C	A	A
N18	E	C	C
N19	B	B	B
N20	C	D	D
N21	B	C	B
N22	A	A	A
N23	C	B	C
N24	E	C	B
N25	A	D	C
N26	E	D	D
N27	E	D	D
N28	D	D	D
N29	E	D	D
N30	E	D	D
N31	E	C	A
N32	C	A	A
N33	B	B	B
N34	B	B	C
N35	D	C	B
N36	C	B	C
N37	A	A	A

表 7 国際文化学科 (クラス)

	2001	2002	2003
L1	C	C	B
L2	B	B	A
L3	E	D	D
L4	B	A	A
L5	B	A	B
L6	C	B	C
L7	C	C	C
L8	B	A	B
L9	D	C	C
L10	D	C	B
L11	C	A	A
L12	B	--	A
L13	D	A	B
L14	B	A	B
L15	A	A	A
L16	D	B	C
L17	E	D	D
L18	B	B	C
L19	D	D	D
L20	D	B	A
L21	D	D	D
L22	A	B	A

5 おわりに

以上、英語力の伸びに合わせ、学生の一人ひとりの学力に合ったクラス編成を行なうために、平成 13 年（2001 年）度より導入している English Placement Test の開発過程、並びに、平成 13～14 年（2001～2002 年）度の実施状況とその結果について述べてきた。今回プレースメントテストを行なったことで、学生一人ひとりの学力を定期的に測定し、それに基づき各学生のレベルにあったクラス編成を行なうシステムが確立できたといえる。つまり、外国語（英語）教育をより効果的に実施するための足掛かりをつくることが出来たと思われる。

また、平成 15 年度中部大学研究設備整備計画費「マークシート読み取り機導入による効果的な外国語教育システムの確立と実践」で、今年度はマークシート読み取り機を購入することができた。これによって、試験終了後、外国語教室で直ちにデータの読み取りおよび分析が出来るようになった。今後は、導入したマークシート読み取り機を活用し、入学時に実施されているフレッシュマンテスト以降測定されていない学生の英語力を定期的に追跡調査することによって、より効果的な外国語教育の有効性を多角的に検討していく予定である。

ただ、現在は Form が 1 つしかないため、今後は、複数の Form を作成し充実させていく必要がある。さらに、きめ細かなクラス編成を定期的 to 実施していくことで、中部大学生の外国語教育システムを向上させていくことをめざしていきたい。

謝辞

Listening 問題作成に際し、1st and 2nd versions（2001 年度版・2002 年度版）における音声吹き込みに関しては、OPELT の Timothy Hoffman 氏、Kristen Hubert 氏、Laura Norris 氏に、録音および編集作業に関しては、1st version（2001 年度版）では語学センターの加藤鉄生氏に、2nd version（2002 年度版）ではメディア教育センターの五十嵐滋氏と松尾聡子氏に依頼し、快く引き受けていただきました。また、マークシート作成などに関して、国際関係学部前事務長の吉田浩隆氏には様々な情報をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

そして、プレースメントテストの監督などでは、英語 II および英語 IV 担当の野田恵剛主任をはじめとする外国語教室・語学センターの先生方にもご尽力いただき、深く感謝申し上げます。また、テスト実施後、マークシートの読み取りにおいては、人文学部英語英米文化学科の塩澤正氏と大門正幸氏のご配慮で、同学科所有のマークシート読み取り機を快く使わせていただき、心から感謝申し上げます。

注

- 1) 英語 I～英語 VI の前身は、国際関係学部が発足した昭和 59 年（1984 年）度にさかのぼる。当時は、外国語科目として英語 I～英語 III および E 群・地域言語部門として英語 I と英語 II が開講されていた。外国語科目としての英語 I・II が 1・2 期に週 4 回と英語 III が 3・4 期に週 2 回開講され、E 群・地域言語部門として英語 I が 3・4 期に週 2 回と英語 II が

5・6期に週2回開講されるというように、2本立てで分かりづらい構成であった。そこで、平成7年（1995年）度のカリキュラム改正の際に、学部専門科目のE群（言語部門）の中にこの2本立ての構成が1つにまとめられ、現在の形の英語Ⅰ～英語Ⅵとなり、英語Ⅰ・Ⅱが1・2期に週3回、英語Ⅲ・Ⅳが3・4期に週2回、英語Ⅴ・Ⅵが5・6期に週2回の開講となった。その後、平成12年（2000年）度には学部専門科目のE群（言語部門）から学部外国語科目に、平成14年（2002年）度には地域言語科目と名称が変わり、現在に至っている。

- 2) 1990年頃、中部大学の学生をはじめとする日本の平均的學生に適した英語の標準テストがなかったことから、当時外国語教室所属の塩澤氏と今村およびOPELTのRobert Scott氏と語学センターの大場毅氏と共同で新たな標準テストを研究開発した。この研究の報告についての詳細は、Shiozawa他（1992）を参照。
- 3) PASEOも2002年度からは、水曜日の7・8時間目と9・10時間目の授業が、水曜日の3・4時間目と5・6時間目に変更になったため、プレースメントテストの実施と重なる心配もなくなった。
- 4) 最頻値（mode）は頻度が最も多かった得

点、中央値（median）は全体の得点を上下に2分する得点、中点は最高得点と最低得点の中間点である。これらは平均値と合わせて中心化傾向を表すための指標となる。また、範囲と標準偏差（および標準偏差の2乗（分散））は散布度の指標となる。表中の統計項目についてはブラウン（和田訳）（1999：第4章）を参考にした。詳しくはそちらを参照。

参考文献

- Brown, James Dean (1996) *Testing in Language Programs*. Prentice Hall Regents, New Jersey. (和田稔訳 (1999) 『言語テストの基礎知識－正しい問題作成・評価のために－』大修館書店.)
- Shiozawa, Tadashi, Hiromi Imamura, Robert Scott, and Takeshi Ooba (1992) Developing "User-Friendly" Tests of English Proficiency: A Standardized Proficiency Test for Average Japanese Students. *FLEAT II*, pp. 451-455.
- The Chauncey Group International (2000) 『TOEIC公式ガイド&問題集』国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC運営委員会.

助教授	国際関係学部	外国語教室	今村 洋美
講師	国際関係学部	外国語教室	柳 朋宏
教授	国際関係学部	外国語教室	山田 伸明